辻　裕子教授　略歴及び著作目録

昭和9年12月6日　神戸市に生まれる。

学歴

昭和28年3月　京都府立園部高等学校卒

昭和28年4月　同志社大学文学部英文学科入学

昭和32年3月　同上、卒業

昭和35年4月　同志社大学大学院文学研究科英文学専攻修士課程入学

昭和38年3月　同上、修了（文学修士）

昭和43年9月　米国ウイスコンシン大学大学院留学（同志社女子大学在外研究）（44年8月まで）

昭和59年4月　国内研究　同志社女子大学専従研究員（60年3月まで）

平成 4 年7月16日
同志社大学より博士（英文学）取得

平成8年4月　ケンブリッジ大学ウルフソン・コレッジにて客員研究員
（同志社女子大学在外研究）（9月まで）

職歴

昭和32年5月　京都府船井郡日吉町立殿田中学校非常勤講師（33年3月まで）

昭和33年4月　京都精華女子高等学校教諭（35年3月まで）

昭和35年4月　同上、非常勤講師（37年9月まで）

昭和38年4月　同志社高等学校教諭（39年3月まで）

昭和39年4月　同志社女子大学学芸学部英文学科研究助手（42年3月まで）

昭和42年4月　同上、専任講師（49年3月 まで）

昭和42年4月　同志社大学非常勤講師（43年3月まで）

昭和49年4月　同志社女子大学学芸学部英文学科助教授（56年3月まで）

昭和55年4月　京都教育大学教育学部非常勤講師（57年3月まで）

昭和56年4月　同志社女子大学学芸学部英文学科教授

昭和57年4月　同志社女子大学学芸学部英文学科主任（59年3月まで）

昭和58年10月　京都教育大学教育学部非常勤講師（61年3月まで）

昭和62年4月　京都大学教養部非常勤講師（平成2年3月まで）

昭和63年4月　同志社女子大学大学院文学研究科英文学専攻（博士前期課程）教授

平成 1 年4月　同志社女子大学宗教部長（平成3年3月まで）
平成 3 年4月　京都教育大学英文学科非常勤講師（平成4年3月まで）
平成 3 年4月　光華女子大学文学部英文学科非常勤講師（平成4年3月まで）
平成 4 年4月　同志社女子大学学芸学部長兼大学院文学研究科長（平成8年3月まで）
平成 5 年4月　同志社女子大学大学院博士後期課程教授
平成10年4月　関西外国語大学非常勤講師（平成12年3月まで）
平成12年3月　同志社女子大学名誉教授
平成12年4月　京都女子大学文学部教授、大学院文学研究科英文学専攻指導教授（契約教授）
平成12年9月　京都女子大学大学院博士後期過程増設協議に係わる教員審査において、文学研究科博士後期課程英文学専攻教授D㊟と判定

学会における活動

昭和39年5月～現在
日本英文学会会員
昭和40年4月～49年3月
日本比較文学会会員
昭和50年10月～現在
日本ミルトン・センター会員
昭和50年10月～平成6年10月
日本ミルトン・センター事務局、実行委員
昭和55年4月～平成4年
日本イェーツ協会会員
平成3年5月～7年5月
日本英文学会評議員
平成6年10月～9年10月
日本ミルトン・センター委員長
平成9年10月～現在
日本ミルトン・センター顧問

研究業績一覧表

I　著書

越智文雄博士喜寿記念論文集『ミルトン－詩と思想』（共著）執筆担当「『失楽園』11巻

12巻におけるエゼキエル書的類型」昭和61年10月（山口書店）

Rhetoric and Truth in Milton – A Conflict between Classical Rhetoric and Biblical Eloquence（単著）平成3年10月（山口書店）博士学位請求論文

Roy Flannagan は*Areopagitica* に関する論評のなかで、上記の拙論に言及し、本書をWorks Cited の 中に入れている。（*Riverside Milton*, ed. Roy Flannagan. Boston New York: Houghton Mifflin Company, 1998.　p. 990, 996.

書評　斉藤和明、『英語青年』37巻9号（1991、11.）

Roy Flannagan, Milton's Quarterly（1993）

原田純『同志社時報』No 92（1991年11月）

『同志社精神とミルトンの自由思想』（単著）平成7年5月（同志社出版）

辻裕子・佐野弘子編『神、男、そして女－ミルトンの「失楽園」を読む』（共著）執筆担当「愛と結婚－ミルトンから『ジェーン・エア』へ」平成9年5月（英宝社）

辻裕子・渡辺昇訳『ミルトン「四弦琴」－聖書と離婚論』（共訳）平成9年7月（リーベル出版）（書評　新井明『英文学研究』Vol. LXXXVI, No. 1, September 1999）

森晴秀教授古希記念論文集　富山太佳夫、加藤文彦、石川慎一郎編『テクストの地平』（共著）執筆担当「ミルトンの自然観―ワーズワスとの接点の一考察」平成17年3月（英宝社）

児玉実英・杉野徹・安森敏隆編『二〇世紀女性文学を学ぶ人のために』（共著）執筆担当「ジョイス・キャロル・オーツ『贅沢なひとびと』」「フエイ・ウェルドン『女友達』」平成19年3月（世界思想社）

17世紀研究会編『ミルトンと十七世紀』（共著）執筆担当「『失楽園』におけるミルトンの環境思想－"dominion" をめぐって―」平成20年3月31日（出版予定）（金星堂）

Ⅱ　学術論文

"Myth and Language in Milton's *Paradise Lost.*"　昭和39年12月（同志社女子大学『学術年報』15巻）

"Syntax and Rhetoric in Milton's Poems" 昭和41年12月（同志社女子大学『学術年報』17巻）

"Rhetoric and Truth in Milton's *Paradise Regain'd*"　昭和44年12月（同志社女子大学『学術年報』20巻）

「クィンティリアヌスの*Institutio Oratoria*における文体論について」昭和46年12月（同志社女子大学『学術年報』22巻）

「英国16世紀における修辞学について—Thomas Wilsonを中心に」昭和48年12月（同志社女子大学『学術年報』24巻）

"From Quintilian to Milton's *Of Education*" 昭和51年11月（同志社女子大学『学術年報』27巻）

「*Paradise Lost: Pandemonium* における弁論—Belialの場合— 」昭和52年3月（同志社英文学会『主流』38号）

"Devils' Speeches in *Paradise Lost*" 昭和53年11月（同志社女子大学『学術年報』29巻）

"Satan's Rhetoric in *Paradise Lost*, Book I" 昭和54年11月（同志社女子大学『学術年報』30巻）

"Plato's True Art of Rhetoric" 昭和54年7月（同志社女子大学英文学会『Asphodel』12号）

「ミルトンの*Areopagitica* における弁論と説教と詩」昭和55年12月（同志社女子大学英文学会『Asphodel』 13号）

"From Prolusions to "*L'Allegro*" and "*Il Penseroso*" 昭和59年7月（同志社女子大学英文学会『Asphodel』 18号）

"The Tragic Note" and the Language of *Paradise Lost*, Book IX" 昭和61年10月（日本英文学会『英文学研究』第63巻第1号）

「ミルトンの『ラムス論理学教程』—その背景と特質」平成10年12月（同志社女子大学『学術研究年報』40巻）

「ミルトンの『四弦琴』と『失楽園』」平成13年1月（阪南大学学会『阪南論集（人文、自然科学編）』36巻第3号（渡辺昇氏追悼記念論文集）

「ミルトンの楽園と自然環境論」平成15年3月（京都女子大学大学院文学研究科研究紀要『英語英文学論輯』第2号）

Ⅲ　翻訳

「D.L.クラーク：ルネッサンスにおける修辞学と詩」（Ⅰ）（辻裕子、坂本清音共訳）昭和48年7月（同志社女子大学英文学会『Asphodel』第6号）

「D.L.クラーク：ルネッサンスにおける修辞学と詩」（Ⅱ）（辻裕子、坂本清音共訳）昭和49年7月（同志社女子大学英文学会『Asphodel』第7号）

「D.L.クラーク：ルネッサンスにおける修辞学と詩」（Ⅲ）（辻裕子、坂本清音共訳）昭和50年7月（同志社女子大学英文学会『Asphodel』第8号）

「D.L.クラーク：ルネッサンスにおける修辞学と詩」（Ⅳ）（辻裕子、坂本清音共訳）昭和51年7月（同志社女子大学英文学会『Asphodel』第9号）

「D.L.クラーク：ルネッサンスにおける修辞学と詩」（Ⅴ）（辻裕子、坂本清音共訳）昭和

52年7月（同志社女子大学英文学会『Asphodel』第10号）

Ⅳ　口頭発表

「ミルトンにおけるラテン語の影響」昭和41年10月　日本比較文学会大会（同志社大学）

「*Pandemonium* における弁論について」昭和51年10月　日本ミルトン・センター第2回研究大会（同志社女子大学）

「サタンのレトリックについて」昭和52年12月　17世紀英文学研究会（大阪梅田ビル）

シンポジウム「西洋教育思想史におけるミルトンの『教育論』」担当「クィンティリアヌスからミルトンの『教育論』へ」昭和56年8月　日本ミルトン・センター第7回研究大会（同志社女子大学）

"From Prolusions to '*L'Allegro*' and '*Il Penseroso*'"　昭和58年8月　第2回国際ミルトン・シンポジウム（英国ケンブリッジ大学クライスト寮）

「『失楽園』第9巻における"Tragic Note" とその言語」昭和59年12月　日本ミルトン・センター第18回研究会（同志社女子大学）

「*Paradise Lost* XI-XII 巻におけるエゼキエル書的類型」昭和61年5月　日本英文学会第55回大会（関西学院大学）

"Agony and Faith in *Samson Agonistes*" 昭和62年7月　第2回国際17世紀学会（英国ダラム大学）

シンポジウム「『失楽園』の主題と構造」
担当「楽園の世界と言語」昭和62年7月　日本ミルトン・センター第13回大会（同志社女子大学）

シンポジウム「ミルトンのGrand Style 再考」
担当「予表論とミルトンのGrand Style について」平成1年5月　第58回日本英文学会青山学院大学

シンポジウム司会「ミルトンとフェミニズム」平成3年10月　日本ミルトン・センター第17回大会（同志社女子大学）

「ミルトンからシャーロット・ブロンテへ」平成4年12月　17世紀英文学研究会（大阪YMCA）

第5回国際ミルトン・シンポジウム　研究発表の司会。ウェールズ大学　平成7年7月

「『四弦琴』から『失楽園』へ—ミルトンの結婚観について」平成12年12月　17世紀英文学会研究会（大阪YMCA）

「*Paradise Lost* におけるミルトンの環境思想」平成18年10月　日本ミルトン・センター（同志社女子大学）

V　講演

「『失楽園』と現代—サタンのレトリック—」昭和63年7月　同志社女子大学夏期公開講座（同志社女子大学）

「『闘技士サムソン』における信仰と苦悩」平成4年4月　同志社大学大学院文学研究科主催（同志社大学）

「新島襄の思想とミルトンの自由思想について」平成6年10月　第15回新島講座東京公開講座（東京有楽町朝日スクエア）

「愛と結婚—ミルトンの『失楽園』を読む」平成12年10月　京都女子大学公開講座（京都女子大学）

「ミルトンと自然環境論」平成14年　同志社女子大学公開講座（同志社女子大学今出川キャンパス）

「ミルトンの結婚観・女性観」平成15年10月　同志社女子大学英文学会東京支部会主催（東京渋谷同志社アカデミー）

「戦争と人間—サムソン・アゴニスティーズを読む」平成17年11月　京都女子大学英文学会（京都女子大学）

「『失楽園』における人間と自然」平成19年11月　京都女子大学公開講座（京都女子大学）

Ⅵ　その他

（書評）Louis Martz, *Poet of Exile : A Study of Milton's Poetry.*『英語青年』第126巻第4号　昭和55年7月

「ミルトンにおけるレトリックと真理－対照法から逆説法へ－」平成4年『日本ミルトン・センター会報』第16号

（辞典）遠藤祐・高柳俊一・山形和美他編『世界日本キリスト教文学辞典』平成6年（教文館）執筆担当「タイポロジー」の項。

（エッセイ）「荒野と庭園」平成9年『ふぉーちゅん』第9号（新生言語文化研究会）